

最近の工芸のトレンド

山形県寒河江市の佐藤繊維

オバマ大統領のミシェル夫人がお召になった黄色い優しい風合いのカーディガン。山形県の佐藤繊維のモヘヤ糸から出来たという話がニュースで日本で話題になりました。

アンゴラヤギの毛 1 グラムを 4 4 メートルまで伸ばした極細モヘヤ糸。不可能と思われた極めて細い糸を紡ぐことが出来たことで、世界中のファッション業界から高い評価を得た佐藤繊維さんは冬になれば雪深い東北は山形県寒河江市の企業です。

四代目社長の佐藤正樹さんの挑戦で、世界に大きく花開いた東北の企業なのです。

ゆずりはでも素晴らしい佐藤繊維さんの布を多数ご紹介しております。



M&KYOKO さんのショール

糸作家 MASAKI さんが世界中を巡り出会った年間ごくわずかしか採れない大変貴重な原料をもとに、佐藤繊維の独自の技術により 4 年の歳月を経て出来あがった最高峰のモヘヤ糸 “Fuuga” このストールは、佐藤繊維が誇るその繊細なモヘヤ糸 “Fuuga” を米沢織りの高度な職人技により極細ゆえに難しかった、たて糸・よこ糸両方に使用することを可能にし、ついに完成したスペシャルなストールです。繊細で軽やかな風合いをぜひ、お楽しみくださいませ。

ゆずりはでは、十和田湖の店舗と全国の展示会で、夏に向かっての佐藤繊維の糸を使った作品をご紹介いたします

店主の最近の活動記録

① 2014/09/02～12

パリの世界的な見本市「サロン・デ・オブジェ」の工芸の展示会視察
フランスの工芸の工房を視察し、欧州のクラフト作家と交流できました。



② 2014/03/04～14 ミャンマーの手作り工芸の視察



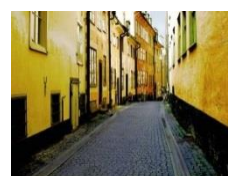
③ 2013/06/03～12

スウェーデンの工芸を視察し、クラフト作家の島での工芸教室も体験

十和田市在住のスウェーデン織の作家、後藤和子さんに連れられて、スウェーデンの工芸を視察するため、6月にヨーロッパへ向いました。

北欧は家具や食器などもカラフルで斬新なデザインで工芸の先進国です。

ムーミンの里であり、数えきれないほどの湖のひとつの島で、夏季講座で工芸教室が開かれておりました。後藤さんは何年も前から何回もスウェーデン織の勉強のために、こちらに来て数か月も滞在し、勉強しているのです。私は語学が堪能な後藤さんの助けを借りて、短い滞在でしたが、いくらかの北欧のデザインと工芸の実態を学ばせていただきました。



思い出される・・・四年前、東北の記憶

2011年3月11日、早や4年、やっと4年、停滞する経済、家族離散など各地に爪痕が残り、まだまだ東北は大震災から完全に立ち直ったとは言えません。

私どもの店、「暮らしのクラフトゆずりは」がある青森県十和田湖も直接的な被害は全くありませんでしたが、東北全体を覆う観光客減に見舞われ、依然、厳しい状況が続いております。

4年前を思い出すと・・・

交通網がズタズタになり、1週間後のゆずりはの、京都展示会は開催不可能と思われました。でも、こんなときこそ頑張らなければと思い、四方八方手を尽くして、ある宅配会社が、営業所まで、モノを持ってきてくれるなら、何とか京都まで開催期限ぎりぎりに間に合わせて運んでくれるという情報が入りました。それっ、と、トラックに荷物を満載し50キロ先の営業所まで運び、何とか開催日に間に合わせました。

京都では、「こんな大変なときによく京都まで来てくれましたね。」と温かい言葉をかけられました。

京都展を開催中のある日、姉妹と思われる女性二人がお越しになりました。ゆっくりと展示物をご覧になっておりましたが、お姉さまと思われる方が、妹さんに籠を差し出して、ひとこと「ハイッ！再出発の籠」と。妹さんにプレゼントしたのです・・・

そのとたん、妹さんは感極まり涙があふれワッとその場に泣き伏したのです。

聞けば、その妹さんは今回の大津波に家が流され、好きで集めていた籠類もすべて津波に流されてしまい、姉を頼って京都に避難していた方だったそうです・・・

私は、被災地の取引先を周り、仙台の木工作家は、工場が地震で全て壊れてしまったということでした。

宮城県石巻市の雄勝町は、雄勝石の産地で、黒いプレートが丸の内の東京駅の外壁の復元工事でも使われました、全国で九割のスズリの生産を誇る町です。雄勝硯生産販売共同組合に20万個もあったスズリが殆んど津波で流されていきました。25人程も居た職人も4～5人しか現地には残っていない惨憺たる状況でした・・・

私は、その惨状を拝見し、あまりの酷さに愕然としました・・・

その瓦礫と泥だらけの工場の中に、地域の方々が、泥の中から拾い集めてくれた5千個ほどの泥まみれの硯を発見しました・・・

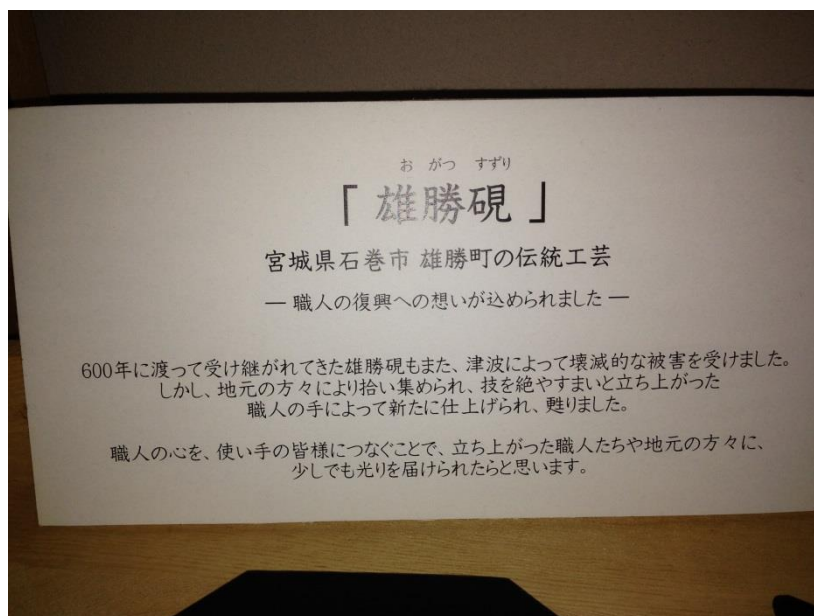
何かお手伝いは出来ないか・・・私は組合の方々に提案しました。

この硯をきれいに洗って、箱に詰め直して全国のお客様に買っていただきましょう・・・

それからというもの、ゆずりはでは一個一万円で箱入りのスズリを利益を取らずそのまま売上を支援し全国の展示会で売って歩きました。東北の現状をお客様にお伝えしながらの販売でした。スズリというものは、今は中国産で安いものもありますし、硯がなければなくても字は書ける時代です。日本で、わずかに残った硯の産地が雄勝町なのです。全国のお客様に百数十個買っていただき、硯の組合を支援しました。お客様の中には一個あれば用が足りるのに、支援のお気持ちから一人で何個も買って下さる方もいらっしゃいました。一年半ほどして、組合から、もう良いですからちゃんとマージンを取って下さいとの連絡が来ました、職人もだいぶ戻って来たとのことでした・・・・・・・・

そのほか、仮設住宅で暮らしている女性たちが、何もしないでいると気が滅入ってしまうとあって、刺し子をはじめ、幼稚な技術ですが、簡単なカモメの柄などを刺したものもありました、それも全国の方々に買っていただきました。

復興はまだまだ終わりませんが、遅く東北の方々は生き抜いております。



最近硯の他 プレートなど新作品にも力を入れている雄勝石の数々

工芸作家さんの近況報告

馬具職人 工藤一三夫さん引退

長年、親しくさせていただいていた、弘前の馬具職人の工藤二三夫（くどうふさお）さんが、引退する、との知らせをいただき、長い間お世話になったお礼と功績に対して花束を贈呈して、感謝の意をお伝えしてきました。



何十年とお店に出ていたのに・・・最後の日でした



最初に出来たバケツ型バッグ

工藤さんとは、十数年前、ふと弘前の街を歩いているとき、亀屋商店という、今はモダンで綺麗なお店になってますが、平屋のかなり年期が入った木造の商店が目に入りました。なにやら、犬の首輪とか、リード、馬の鞍などを飾っている、皮製品のお店でした。その店先で一所懸命なにやら手を動かしている方が、工藤二三夫さんでした。その時、ピンとひらめきました。そのまま、なんの面識もないまま、お店に入り、バッグを作っただけませんか。と尋ねました。昔、弘前相互銀行の集金カバンは作ったことがあるけどなあ。とのお話。それからというもの、私は十和田と弘前の道路を何度も行き来し、コラボして試作品を何度も作りました。最初、柔らかい薄い革でやってみましたが、工藤さんは浮かない顔です。ハッと気づきました。工藤さんは馬具職人です。馬具は厚い革で、丈夫なのが命です。厚い革で作ってみたらガッチリして丈夫なものが完成しました。最初はバケツ型のバッグでした。四角いトートバックなど数種類のバッグや小物入れなど、作品が次々とモダンな現代の生活に生かせるものが出来てきました。「工藤さん！壊れたら直してくれますか？」「良いよ。んでも、壊れねびょーん」

今では「東北のエルメス」と言われ、県や弘前市から表彰されるほどになりました。90歳を迎え、現役引退の時期が来てしまいました。長い間ありがとう御座いました。十数年前、娘さんに言ったそうです。「十年前に田中陽子さんと出会っていたらなあ！」そしたら娘さんが言ったそうです。「お爺ちゃん！あと十年長生きしたらいいじゃない」まだまだ長生きして下さい。工藤さん！

十和田湖通信

昨年11月中旬より十和田湖の店舗は冬季休業しておりました、「暮らしのクラフト ゆずりは」は長い越冬生活でしたが、装いも新たに、本年4月11日(土)より11月中旬までの本年の営業を再開いたします。雪に閉ざされている間は、ゆずりはの充電期間でした。本年に向けての新たな企画や、作品を取り揃えて、まだ雪解けの雪が残りますが、スタッフ一同お待ち申し上げます。きっと、本年は十和田湖で新たなクラフトを発見できるよう、より良いものをご紹介できるよう頑張ります。

十和田湖 お電話 0179-75-2290、info@yuzuriha.jp



十和田湖 ゆずりは店舗



店内



店長 川村友子

陸の孤島だった十和田湖に春が来ました

十和田湖の冬は八戸や青森の新幹線の駅からのバスも止まり、公共交通機関が途絶え、タクシーかレンタカーしか交通手段がなく、半年間は全くの陸の孤島となります。

レンタカーも雪が多いときや、春先には雪崩のため、時々奥入瀬溪流が不通になる場合もあり、雪道に慣れない方にはあまりお勧めできません。

でも、陸の孤島となりますが、新雪が止んだあとの、湖と空の青と白い雪とのコントラストは、何物にも代えがたい美しさと清々しさがあり、紅葉の時期に負けない美しさがあります。それは、地元の人間しか見ることが出来ない美しさです。でも雪深い十和田湖にもやっと春が来ました



ゆずりは掲載誌のご案内

- ① NHK テレビテキストで現在発売されている本で「にっぽんの布を楽しむ」の中で84頁から101頁が青森県のゆずりはが扱っている、南部ひし刺しと弘前こぎん刺しが取上げられております。わたくしも刺し子の帯を締めて刺撮影となり、刺し子の説明をし、12月30日、1月6日に放映されました。
- ② 2月20日発売 美しいキモノ 春号に「北海道・東北の染織品大リスト」に「ゆずりは」でご紹介するキモノの数々が紹介されました。
- ③ 3月29日発売 きものサロン春夏号57頁に「ゆずりは」の着物と帯が取上げられました。



店主からの提案

ホームスパンで洋服を作りませんか？

手紡ぎ手織の毛織物“ホームスパン”を生地に洋服を仕立ててみませんか。

ホームスパンの技術は明治の後期、英国の宣教師により、岩手に伝わりました。

冬の厳しい寒さが続く、岩手県盛岡市……

ホームスパンは地元の人々にとって、なくてはならないものでした。

ストールが主流ですが、ジャケットとかも素敵です。手紡ぎ、手織りであることで、機械の大量生産とは違い、過度な熱が加わらず、毛玉にもなりにくく、軽く含まれる空気もたくさんで、ほどよい手仕事ならではの味わいは、何ものにも代えがたい心地を感じさせてくれます。一生手離せない大切な一着となることでしょう。

お仕立てにお困りの方には、長く店主がお世話になっているデザイナー遠藤陽子さんをご紹介いたします。樹木希林さんの洋服を手掛け、パリで活躍されていた方です。必ずや、ご満足いく仕上がりになるのは間違いありません。

是非、この機会にホームスパンの洋服を作られたら如何でしょうか。



店主のひとりごと

ゆずりはでは、国立公園十和田湖に店を構えているため、観光にいらしたお客様を中心に顧客が日本中に散らばっております。

三大都市圏だけではなく、僅か数名の顧客名簿しかない、十和田湖から遠い地域にまで、お客様を訪ねる旅をしております。

四国のある県に行ったときのことでした。地元の新聞社に御挨拶すると、言われました・・・
「東京から来たのなら分かるが、どうして、東北の田舎からこんな四国の田舎まで来るの？」

でも、一期一会。十和田湖へ観光にいらしてわたくしどもの店を訪ねていらして、東北にもこんな素晴らしい手作り工芸があるんだと、感心してお帰りになるお客様と再度お会いできること・・・

何年も会ってなかった旧友に会ったようなうれしさ。

お客様も十和田湖の風景を思い出しながら話に華がさいて・・・

12月の最後の展示会場は沖縄県那覇市。

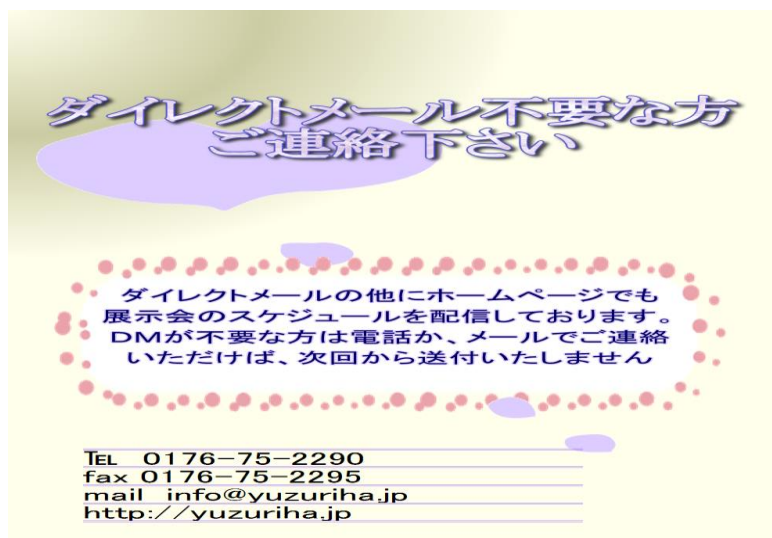
顧客名簿の数はわずかに十数名だけ・・・

でも、全国各地でよく青森県の奥地からこんなところまで、来てくれましたね、と言っただけののがなよりの喜びです。

全国で行ってない県は片手で数えることができるくらいになりました。

ここまできたら、全国津々浦々まで参ります。

「ゆずりは便り」はゆずりはのホームページでカラーでご覧いただけます。
<http://craftshopyuzuriha.jp> 中の「各種情報」の中に「ゆずりは便り」とあり PDF ファイルを開けば、写真などがカラーでご覧になれます。



ダイレクトメール不要な方
ご連絡下さい

ダイレクトメールの他にホームページでも
展示会のスケジュールを配信しております。
DMが不要な方は電話か、メールでご連絡
いただければ、次回から送付いたしません

TEL 0176-75-2290
fax 0176-75-2295
mail info@yuzuriha.jp
http://yuzuriha.jp